



そこにサッカーがあったから

サッカー解説者 北澤 豪

KITAZAWA TSUYOSHI



PROFILE

1968年東京都出身。読売サッカークラブ・ジュニアユース、本田技研工業サッカー部を経て、読売クラブ(現東京ヴェルディ)に移籍。日本代表としても活躍。現役引退後は、サッカー解説者の傍ら、国内外の若者へのサッカー普及に取り組む。2004年よりJICAオフィシャルサポーター。著書に「サッカーが子どものこころを育てる」(実業之日本社)。

現役時代から、開発途上国の子どもたちにサッカーを教えています。きっかけは「そこにサッカーがあったから」。世界中どこに行っても、サッカーがあれば不思議と通じ合える。サッカーに携わる者として、選手を夢見る子どもたちに、何かできることがあればと思ったんです。

日本と途上国では、「スポーツ」の位置付けが違います。アフリカの子どもたちに聞くと、「有名になってお金を稼いで、親孝行したい」とか、僕らとはゴールがまったく別の場所にあるんです。だからこそ、底知れぬパワーを感じる。ボールもスパイクもない。そんな中から選ばれて這い上がって行く彼らは、まさにその国のヒーローなのです。

パラグアイの学校に行った時、100人に1個しかボールがないのを見て驚きました。50対50でゲームをやるわ

けにはいかない。どうするのかと思って見ていたら、エアでドリブルの練習を始めたんです。すごかった。モノがないなりにどうにかしようとする底力には、目を見張るものがあります。

南アフリカ共和国では、アパートヘイト※の名残でしょうか、コーチが命令するような指導をしていて、子どもたちは「怖いから言うことを聞いている」という印象を受けました。もちろん、ときには厳しさも必要ですが、「なぜそれが大切か」を教えることが大事。グラウンドの掃除にしてもそう。「自分の夢をかなえる場所をごみ箱にしちゃだめだろ」と説明すれば、自然とみんなでごみ拾いをしよう!という声が上がってきます。

スポーツ分野で、日本が途上国に伝えていくべきことはたくさんあると思います。実技以外にも、指導力、分析力、大会の運営方法などはすべ

て、子どもたちの能力を引き出し、伸ばしていくために必要なことです。そして何より、スポーツは「人間力」を育みます。勉強ももちろん大切ですが、それだけでは隣にいる仲間を思いやる気持ちは生まれません。僕自身、人生に必要なことはすべて、サッカーを通じて学んだといっても過言ではありません。

2010年のサッカーワールドカップは、初のアフリカ大陸での開催となります。世界とアフリカがつながる大きな一歩一。現地の子どもたちも、今まで夢見ていた「世界」をより近くに感じられるのではないのでしょうか。そしてこの大会をきっかけに、少しでも多くの人が、アフリカのために何ができるかを考えるようになってくれることを期待しています。

※南アフリカ共和国で行われた白人と非白人の人種隔離政策。1994年に完全撤廃された。